

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 20 日現在

機関番号：32702

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26380907

研究課題名(和文)子どもの叱り方尺度の作成とタッチを用いた怒鳴らない叩かない子育てプログラムの開発

研究課題名(英文)Development of a parental discipline scale to children and parental training using touch for mothers who have difficulty discipline

研究代表者

新井 典子(Arai, Noriko)

神奈川大学・人間科学部・准教授

研究者番号：70570216

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、叱り方尺度の作成、叱り方の影響要因と臨床的介入、叱り方と子どもの問題行動との関連、身体接触を用いた叱り方プログラムの効果(FTP)を検討することであった。本研究では、叱り方尺度の4因子構造(暴力的な身体接触・愛情的な身体接触・肯定的なしつけ・感情的なしつけによる罪悪感)が確認された。肯定的なしつけと母親の抑うつに負の関連があった。叱る時の愛情的な身体接触は子の自己抑制を低め、肯定的なしつけは子の自己主張を高めることが見いだされた。叱り方プログラム(FTP)は、母親の肯定的な養育行動(例子どもを気持を考慮)を高め、否定的な養育行動(例子どもを怒鳴る)を少なくした。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is:(1)to construct a parental discipline scale,(2)to examine the influential factor on discipline and the direction of clinical intervention,(3)to examine the relationship between maternal discipline and child problematic behavior,(4)to examine the effect of parental training of discipline using touch(FTP).The main results were as follows:(1)A parental discipline scale has a four factors structure, such as 1:harsh touching factor ,2: affectionate touching factor ,3:affirmative discipline factor ,4:a sense of guilt caused by emotionally charged discipline factor.(2)Affectionate touching by mothers during scolding was related to decreasing the child's self-control and increasing the child's self-assertion.(3) Parental training using touch for mothers concerning child discipline has effects that enhance affirmative nurturing behavior to the child and reduced negative nurturing behavior to the child during scolding.

研究分野：発達心理学

キーワード：叱り方尺度 身体接触 子育て支援プログラム 虐待予防

1. 研究開始当初の背景

児童虐待の現状

近年、全国の児童相談所が受けつけた虐待対応件数は、10万件を超え過去最高になっている。それと同時に、現代社会の子育ての問題として、子どもとの接触経験の少なさによる親の育児手技の未熟さや、子育ての孤立化による育児困難感の増加も顕在化してきている。虐待は、もはや特別な家族にだけ起こる問題でなく、一般的な家族でも起こりえる問題である。従って、虐待発見の取り組みだけでなく、乳幼児期からの早期の虐待予防の取り組みが求められている。

子どもの叱り方と児童虐待

子どもへのしつけによる体罰と虐待と判断する基準を線引きすることは難しい。母親の多くは、手のひらで子どもを軽く叩く程度は許容できると認識しており（金谷・杉浦,2006）、暴力を肯定する気持ちが認められる。しかしながら、子どもを怒鳴り、叩くという行動は、しつけに逆効果であるだけでなく、親の力による統制がさらに強まり、身体的虐待や心理的虐待に発展する可能性を秘めている。子どもを叱る際に体罰は是認されるか否か、どこからがしつけでどこからが虐待であるのか、適切な叱り方を提案するエビデンスを集積していく必要があるだろう。

以上より、「子どもの叱り方」について、焦点を当てた子育て支援策が必要と考える。

虐待予防のタッチの臨床的応用可能性

母子間のタッチを介するコミュニケーションは、母親の精神的健康(抑うつ・育児ストレス等)と密接に関連する。麻生・岩立(2012)は、乳児を持つ母親のタッチを類型化し、精神的健康との関連を検討した。その結果、遊びや授乳、寝かしつけ場面で、なでるやさわる等の肯定的意味の「共通に頻繁なタッチ」を行う母親は抑うつ得点が低かった。一方、授乳や寝かしつけ場面で、突つき等の否定的意味の「特有に稀なタッチ」を行う母親は

抑うつ合計得点が高かった。

一方で、母親が子どもに対し、なでるやさわる等の肯定的タッチを行うことで、母親の精神的健康が改善する(麻生,2012)。麻生(2012)は、乳児をもつ母親にファンクショナル・タッチペアレンティング(以下 FTP と略す)を実施した。FTP は、麻生(2010)の研究に基づき作成され、「子どもの欲求を理解し、養育場面に応じた身体接触(機能的タッチ)を修得するプログラム」である。プログラムの実施前後で比較した結果、実施後に母親の抑うつ得点が減少し、養育行動の技能得点が高くなった。つまり、タッチに焦点をあてた臨床的アプローチは、母親の精神的健康の改善や親子関係の構築、養育行動の習得など様々な側面への効果が期待できる。従って、本研究の子どもを叱る場面においても、子どもが何故叱られる行動を行ったかを母親が的確に理解し、子どもの欲求に見合った身体接触(機能的タッチ)を提供することで、子どもの問題行動のエスカレーションが減少し、結果的に母親が叩く・怒鳴るなどの潜在的虐待を未然に防ぐことが出来る。

2. 研究の目的

目的1: 子どもの叱り方尺度を構成する質問項目を作成し、信頼性と妥当性を検討した。

目的2: 作成した子どもの叱り方尺度を使って、叱り方の影響要因と母親の叱り方に対する臨床的介入の方向性を検討した。

目的3: 母親の叱り方が子どもの問題行動に与える影響と、子どもの叱り方に悩む母親を対象に、身体接触を用いた叱り方を改善する子育て支援プログラムを実施し、その効果を検討する。

3. 研究の方法

目的1: 子どもの叱り方尺度の作成

研究1: 乳幼児をもつ親2名を対象に、子どもの叱り方尺度の質問項目の妥当性について面接調査を行った。叱り方尺度は、麻生

(2010) で得られた質問項目を参考にして作成した。叱り方尺度は、叱る時の養育行動 22 項目と叱った後の養育行動 11 項目の計 33 項目で構成された。

研究 2: 認定保育園 11 園の幼児クラスに在籍する保護者を対象に、子どものしつけと身体接触を用いたコミュニケーションに関する質問紙調査を行った。研究協力の同意が得られた保育園を通じて、682 名の保護者にアンケートを配布し、213 名から回答が得られた (回収率 31.5%)。質問紙の項目は、対象者属性 (出産経験・授乳方法・育児協力者等)、身体接触時間 5 項目 (遊び・泣き・寝かしつけ・食事・入浴) と非身体接触時間 1 項目、叱り方尺度 33 項目 (麻生, 2010) 自己制御機能尺度 20 項目 (水野・本城, 1998)、SDS 尺度 20 項目 (福田・小林, 1973) で構成した。

目的 2: 叱り方の影響要因と臨床的介入

研究 3: 保育士 24 名に対して、身体接触を用いた子育て支援プログラム (麻生, 2014) を実施し、実施前後で質問紙調査を行った。質問項目は、ワーク到達度 11 項目 (子どものなだめ方がわかる等) を設定した。

研究 4: 支援者 37 名に対して、身体接触を用いた子育て支援プログラムを実施し、実施前後で質問紙調査を行った。質問項目は、ワーク到達度 4 項目 (泣きのなだめのタッチがわかる等) であった。

研究 5: 妊婦とその夫、乳児をもつ母親 15 名を対象に、身体接触を用いた子育て支援プログラムを実施し、実施前後で質問紙調査を行った。質問項目は、ワーク到達度 4 項目 (授乳時のタッチがわかる等) であった。

研究 6: 中高大学生とその保護者を対象に、身体接触を用いた子育て支援プログラムを実施し、実施前後で質問紙調査を行った。質問項目は、ワーク到達度を示す 4 項目 (親子の絆の大切さがわかる等) であった。

研究 7: 親子連れや思春期の子をもつ親、支援者 44 名を対象に、身体接触を用いた子育て支援プログラムを実施し、実施前後で質問紙調査を行った。質問項目は、ワーク到達度 4 項目 (人とのコミュニケーションにタッチが大事だとわかる等) であった。

目的 3: 叱り方と子どもの問題行動との関連、身体接触を用いた叱り方プログラム (FTP) の検討

叱り方と子どもの問題行動

研究 8: 保育園に在園する幼児をもつ母親を対象に、養育態度と子の自主性と自律性の質問紙調査を行った。500 名の保護者にアンケートを配布し、同意が得られた 162 名から回答が得られた (回収率 30.7%)。質問紙の構成は、親役割診断尺度 (谷井・上地, 1993) 49 項目とエリクソン心理社会的段階目録検査 63 項目 (中西・佐方, 2001) であった。

研究 9: 保育園に在園する幼児をもつ母親を対象に、叱り方と身体接触、子どもの自己主張に関する質問紙調査を行った。保護者 126 名にアンケートを配布し、同意が得られた 47 名から回答が得られた (回収 37.3%)。質問紙の構成は、身体接触量 (遊び・泣き・寝かしつけ・食事・入浴) と非接触時間、叱り方尺度 30 項目 (麻生, 2010)、泣き場面のタッチ評定尺度 (麻生, 2016)、内的作業モデル尺度 18 項目 (戸田, 1988)、幼児用自己制御機能尺度 22 項目 (大内, 2012) であった。

叱り方プログラム (FTP) の検討

研究 10: 予備的な叱り方プログラムを作成し、幼児の叱り方に悩む母親 5 名を対象に実施した。初回に研究の主旨を説明し、同意をしてくださった方に、実施前後で質問紙調査を行った。麻生・岩立 (2012) を参考に各回のワークを作成した。各回のワークは、オリエンテーション、子どもの観察、困った場面の観察、叱る場面、かんしゃくとなだめのワーク、叱り方とほめ方等であった。質問紙の

構成は、全対象者に1回目と8回目に、叱り方尺度(麻生,2014) 33項目、SDS日本語版(福田・小林,1973) 20項目、多次元的共感性尺度(登張,2003) 30項目の質問紙調査を行った。また、プログラムの内容の理解度を図るために、2回目から7回目の各回にワーク到達度3項目を実施した。9回目に養育行動の変化(麻生,2012) 12項目とプログラムの満足度23項目を実施した。

研究11:研究10の結果をもとに、叱り方プログラムの改訂版を作成した。改定したプログラムを叱り方に悩む幼児をもつ母親7名に実施し、その効果を検討した。質問紙の構成は、研究10と同様のものを使用した。

4. 研究成果

叱り方尺度の作成

叱り方尺度の質問項目の構成

乳幼児をもつ親2名を対象に、叱り方尺度33項目(麻生,2010)の妥当性について、面接調査を行った(研究1)。その結果、「子どもを蹴る」等の表現は、虐待行為としては妥当であると判断した。よって、叱り方尺度の全33項目を採用した。

叱り方尺度の因子分析

認定保育園の幼児クラスに在籍する保護者213名を対象に、子どものしつけと身体接触を用いたコミュニケーションに関する質問紙調査を行った(研究2)。

叱り方尺度(麻生,2014)33項目に関して、探索的因子分析を行った。固有値の推移と解釈可能性を考慮し、4因子(第1因子暴力的な身体接触、第2因子愛情的な身体接触、第3因子肯定的しつけ、第4因子感情的しつけによる罪悪感)を抽出した。

叱り方尺度の因子構造の信頼性と妥当性

各因子の α 係数を算出した結果、「第1因子暴力的な身体接触」は $\alpha = .769$ 、「第2因子愛情的な身体接触」は $\alpha = .851$ 、「第3因子肯定的しつけ」は $\alpha = .748$ 、「第4因子感

情的しつけ」は $\alpha = .619$ であり、概ね許容できる信頼性が得られた。各因子の項目の評定値を合計し、因子得点とした。パーセル化により、各因子得点を観測変数にして、共分散構造分析により検証的因子分析を行った。その結果、叱り方尺度の因子構造モデルの適合度は良好であった($\chi^2(df:1) = 2.196$, $GFI = .995$, $AGFI = .949$, $CFI = .983$, $RMSEA = .075$)。

子どもの叱り方の影響要因

叱り方尺度の4因子とその影響要因(子どもの年齢・母親の抑うつ等)との関連を検討した(研究2)。相関分析の結果、「暴力的な身体接触」と「肯定的しつけ」間に有意な正の関連、「愛情的な身体接触」と「肯定的しつけ」、「感情的しつけによる罪悪感」、身体接触の「休日量」と「平日量」との間に有意な正の関連が認められた。「肯定的しつけ」と「感情的しつけによる罪悪感」、身体接触の「休日量」との間に有意な正の関連が認められた。「肯定的しつけ」と「抑うつ」との間に有意な負の関連が認められた(表1参照)。

表1 叱り方尺度の4因子と身体接触量と抑うつとの関連

項目	F1	F2	F3	F4	休日量	平日量	抑うつ
叱り方尺度							
F1: 暴力的な身体接触	1	-	-	-	-	-	-
F2: 愛情的な身体接触	.107	1	-	-	-	-	-
F3: 肯定的しつけ因子	.216**	.420**	1	-	-	-	-
F4: 感情的しつけによる罪悪感	-.133	.259**	.212**	1	-	-	-
身体接触量							
身体接触の休日量	.035	.222**	.146*	.072	1	-	-
身体接触の平日量	.016	.170*	.109	.073	.927**	1	-
抑うつ	-.120	-.057	-.160*	.061	-.121	-.014	1

注.* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

叱り方と子どもの年齢との関連

従属変数を叱り方の4つに因子にし、独立変数を子の年齢要因(1歳・2歳・3歳・4歳・5歳)にしたノンパラメトリック検定を行った(研究2)。その結果、「愛情的な身体接触」で、子どもの年齢要因の主効果が認められた。下位検定の結果、3歳と5歳間、4歳と5歳間で有意差が認められた(図1参照)。

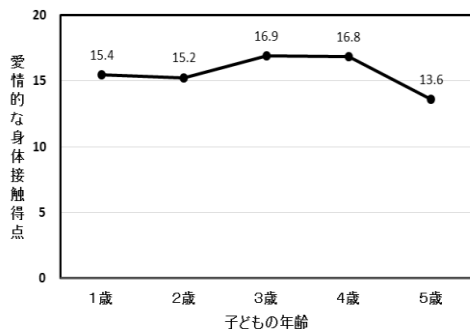


図1 叱る場面における親の愛情的な身体接触 (子どもの年齢別変化)

身体接触を用いた臨床的介入

身体接触を用いた子育て支援プログラムを様々な対象（保育士・支援者・妊婦とその夫・中高大学生と保護者・成人等）実施し、そのプログラムの効果を検討した（研究 3～研究 7）。いずれの講座でも、各回のワーク到達度（子どものなだめがわかる等）が実施後に有意に高くなり、教育的効果が認められた。

叱り方と子どもの問題行動

研究 2 では、叱り方の 4 因子と子どもの自己制御機能との関連を検討した。その結果、叱る場面の「愛情的な身体接触」と子どもの「自己抑制」が有意な負の相関が認められた。また、「肯定的しつけ」と「自己主張」に有意な正の相関が認められた。

研究 8 では、親の養育態度と幼児の自立性と自主性との関連を検討した結果、「干渉的な養育態度」と「子育てへの不安」は、子どもの「自主性」と「自己コントロール」の間に有意な負の相関が認められた。

研究 9 では、母親の叱り方と母親の内的作業モデル、子どもの泣きのなだめ、自己制御能力との関連を検討した。その結果、母親の「肯定的しつけ」は、「泣き場面のなだめのタッチ」等を増やし、「感情的しつけによる罪悪感」は子どもの「自己主張」を抑制する可能性が示唆された。

叱り方プログラム (FTP) の効果

身体接触を用いた叱り方プログラム (FTP) を作成し、叱り方に悩む幼児をもつ

母親 6 名に 8 回プログラムを実施し、その効果を検討した。初回は予備的プログラム（研究 10）を作成し、2 回目は予備的プログラムを改定し、その効果を検討した（研究 11）。実施前後で質問紙調査を実施した結果、実施後には肯定的な養育行動が増え、否定的な養育行動が少なくなることが見出された。

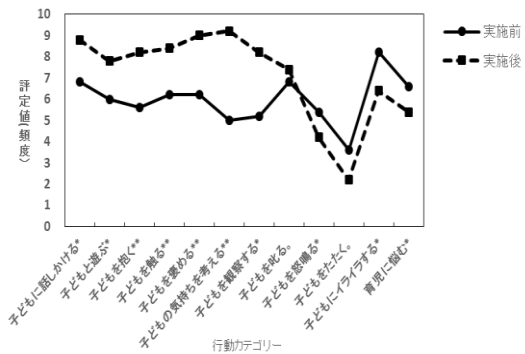


図2 叱り方プログラムの実施前後の養育行動の変化

<引用文献>

- ① 麻生典子、乳児を持つ母親におけるタッチの心理学的研究、日本女子大学大学院人間社会研究科心理学専攻博士後期課程博士論文、2010、1-128
- ② 麻生典子、岩立志津夫、乳児を持つ母親のタッチの種類と精神的健康との関連：タッチをいつもする母親としない母親を基準とした比較、日本女子大学紀要人間社会学部、22、2012、61-73
- ③ 麻生典子、岩立志津夫、生後 4 か月児をもつ母親におけるタッチの養育場面間の相違：母親の出産経験、授乳方法の違いに注目して、小児保健研究、65、2011、488-497
- ④ Noriko, Aso&Shizuo, Iwatate. Differences in Japanese mothers' touch of their 4 month-old infants based on the result gleaned from a questionnaire survey by nurturing scenes : focusing on playing, crying, feeding, and putting infants to sleep scenes, 38, 2012, 83-91.

5. 主な発表論文等

- [雑誌論文] (計 7 件)
- ① 麻生典子、三世代家族の子育て支援：関係の豊かさに気づくために、子育て支援と心理臨床、査読無 13、2017、26-32
 - ② 麻生典子、多職種協働による地域の子育て支援における臨床心理士の役割、心理臨床学研究、査読有、34(4)、2016、411-422
 - ③ Noriko, Aso & Shizuo, Iwatate. The effect of maternal breast-feeding in

Japanese Mothers : Focusing on maternal touch to infants, depression, and child rearing stress, Journal of Applied Psychology, 査読有, 42(special edition), 2016, 60-66

- ④ 麻生典子、心理カウンセリングのツボ(3) 地域の子育て支援における多職種協働による心理支援のコツ、子育て支援と心理臨床、査読無、12、2016、106-108
- ⑤ 麻生典子、岩立志津夫、乳児に対する母親のタッチの関連要因：初産婦と経産婦の比較、小児保健研究、査読有、75 (2)、2016、187-195
- ⑥ 麻生典子、訪問面接で家族と会うとき：子育て支援の現場から、家族心理学年報、査読無、33、2015、103-112.
- ⑦ 麻生典子、岩立志津夫、母親の抑うつと育児ストレスが乳児へのタッチに及ぼす影響：子どもの遊び、泣き、授乳、寝かしつけ場面に注目して、日本女子大学人間社会研究科紀要、査読無、第 21 号、2015、49-59.

〔学会発表〕(計 13 件)

- ① 川邊一申、麻生典子、母親の養育態度と幼児の自律性と自主性との関連、日本発達心理学会第 28 回大会、2017 年 3 月 26 日、広島国際会議場
- ② 西坂小百合、岩立京子、松井智子、木千里、岩立志津夫、保育者と保護者による幼児の非認知能力の評価、日本発達心理学会第 28 回大会、2017 年 3 月 26 日、広島国際会議場
- ③ 船越かほる、岩立志津夫、青年期女子の自己を定義する記憶 (SDM) : 大学別による自伝的記憶は異なるのか、日本発達心理学会第 28 回大会、2017 年 3 月 26 日、広島国際会議場
- ④ 麻生典子、身体接触を用いた幼児の叱り方プログラムの作成：しつけに悩む母親を対象として、日本発達心理学会第 28 回大会、2017 年 3 月 25 日、広島国際会議場
- ⑤ 麻生典子、身体的虐待が疑われる母親に対する解決志向ブリーフセラピーの試み：多職種協働による虐待の初期対応をめぐる、日本心理臨床学会第 35 回秋期大会、2016 年 9 月 5 日、パシフィコ横浜
- ⑥ Noriko, Aso. The effect of parent-training using touch for mothers who have infants.: New practice as Functional Touch Parenting(FTP) in regional child-care support, 31st international Congress of Psychology, 2016 年 7 月 29 日、Yokohahama.
- ⑦ 麻生典子、乳児に対する母親のタッチタイプと身体部位：遊び場面に注目して、日本発達心理学会第 27 回大会、2016 年 5 月 1 日、北海道大学

- ⑧ 麻生典子、ファンクショナル・タッチペアレンティング (FTP) の効果：虐待ハイリスクを対象として、日本子ども虐待防止学会第 21 回学術集会にいがた大会、2015 年 11 月 21 日、朱鷺メッセ (新潟)
- ⑨ 麻生典子、虐待する親が親になるプロセス：乳児期から就学前までの心理支援の課題、日本心理臨床学会第 34 回大会、2015 年 9 月 20 日、神戸国際会議場
- ⑩ 麻生典子、子どもの叱り方尺度の作成：保育園児を対象にして、日本発達心理学会第 26 回大会、2015 年 3 月 20 日、東京大学
- ⑪ 麻生典子、地域の子育て支援による臨床心理士によるシステムズ・アプローチ：母親と社会、子ども、夫婦がつながるプロセス、日本心理臨床学会第 33 回大会、2014 年 8 月 35 日、パシフィコ横浜
- ⑫ Noriko, Aso & Shizuo, Iwatate. Influences of childcare support and maternal mental health on infant touch: Focusing on differences in mother's feeding methods. 28th International Congress of Applied Psychology, 2014 年 7 月 10 日, Paris, France.
- ⑬ 麻生典子、子育て支援における身体接触を用いたペアレントトレーニングの実践：乳幼児をもつ母親を対象として、日本発達心理学会第 25 回大会、2014 年 3 月 22 日、京都大学

〔図書〕(計 4 件)

- ① 岩立志津夫、言語発達研究の理論と歴史、そして展望、田島信元・岩立志津夫・長崎勤(編)、新・発達心理学ハンドブック、2016、155-164、福村出版
- ② 麻生典子、チェックリスト法、田島信元・岩立志津夫・長崎勤(編)、新発達心理学ハンドブック、2016、877-881、福村出版
- ③ 麻生典子、乳幼児をもつ母親におけるタッチの研究、2016、129、風間書房
- ④ 麻生典子、ファンクショナル・タッチペアレンティングマニュアル：トレーナー養成講座テキスト、2014、177、親と子のタッチ研究会

6. 研究組織

- (1) 研究代表者
新井(麻生) 典子 (Arai(Aso) Noriko)
神奈川大学・人間科学部人間科学科・准教授
研究者番号：70570216
- (2) 研究分担者
岩立 志津夫 (Iwatate Shizuo)
日本女子大学・人間社会学部心理学科・教授
研究者番号：80137885
- (3) 連携研究者 なし